



| | |
|---------------|------|
| インターネットでの情報提供 | |
| 提供予定日 | 2月8日 |

| | | | |
|-------------------------------------|-------|------------------------------|--------------|
| 平成26年2月7日（金）県政記者クラブ配布資料・高山記者クラブ配布資料 | | | |
| 担当課 | 担当係 | 担当者 | 電話番号 |
| 中山間農業研究所 | 試験研究部 | <small>そでがき</small> 袖垣 一也 | 0577-73-2029 |

「中山間農業研究所本所研究成果検討会」の開催について

岐阜県中山間農業研究所では、中山間農業を取り巻く諸課題に的確に対応した新たな技術開発を行うため、地域と一体となった研究に取り組んでいます。

このたび、地域農業に関わる方や関係者に対し平成25年度の試験研究の成果を報告し、生産現場へ迅速な普及を図ることを目的として、下記のとおり「中山間農業研究所本所研究成果検討会」を開催します。

記

- 日時 平成26年2月14日（金） 13:30～16:00
- 場所 飛騨総合庁舎3階大会議室
(高山市上岡本町7-468 電話:0577-33-1111)
- 参集者 約100名 農業者、農業関係団体・市町村職員等
- 成果報告の内容

◆園芸作物の高品質生産を可能にする汎用性低コスト雨よけハウスの開発について (13:45～14:05)

まえだ たけし
前田 健 主任研究員

◆長ナス「筑陽」^{ちくよう}に対する飛騨地域での独立袋栽培の適応性について (14:05～14:25)

かわせ
川瀬あゆ子 研究員

◆温暖化がモモの耐凍性に及ぼす影響と耐凍性台木の利用効果について (14:25～14:43)

みやもと よしあき
宮本 善秋 主任専門研究員

◆収穫量の増大を可能にするハウレンソウの連続移植栽培について (14:43～14:58)

なかにし ふみのぶ
中西 文信 専門研究員

◆トマト葉先枯れ症の発生と軽減対策について（第二報） (15:10～15:30)

ふたむら あきお
二村 章雄 専門研究員

◆飛騨産「コシヒカリ」の品質と食味向上対策について（第一報） (15:30～15:45)

やまだ たかし
山田 隆史 専門研究員

※報告内容の詳細は裏面のとおりです

平成25年度中山間農業研究所本所試験研究成果検討会要旨

◆園芸作物の高品質生産を可能にする汎用性低コスト雨よけハウスの開発

前田 健 主任研究員

トマトやホウレンソウ栽培への導入が進んでいる雨よけハウスは、農作物を雨から守り、また、^{かんすい}灌水を調節することで高品質生産ができるメリットがありますが、建設にコストがかかることから収益性が比較的高い品目への導入に限られています。そこで、簡単に設置できる雨よけハウスを開発し低コスト性を研究したところ、骨材費を一般的な雨よけハウスの14~48%に抑えることが出来ました。また、このタイプのハウスでグリーンアスパラガス、レタス、キク、スクナカボチャの栽培試験を行ったので報告します。

◆長ナス「筑陽」に対する飛騨地域での独立袋栽培の適応性

かわせ 川瀬あゆ子 研究員

当研究所中津川支所で開発した独立袋栽培は、土から感染する病害の対策として開発され、長卵形ナス品種「千両二号」で普及が始まっています。当研究所本所の所在する飛騨地域のナス生産地でも同様の病害に対する技術が求められていますが、同地域で主に栽培されている長ナス品種「筑陽」は「千両二号」と栽培特性がやや異なります。そこで、「筑陽」での独立袋栽培の適応性を、袋の設置方法、仕立て本数、摘葉方法、培土の地温抑制のための遮光方法等により検討しましたので報告します。

◆温暖化がモモの耐凍性に及ぼす影響と耐凍性台木の利用効果

みやもとよしあき 宮本善秋 主任専門研究員

近年、全国的に温暖化の影響と考えられるモモ幼木の凍害が急増していますが、当研究所が育成した耐凍性台木品種「ひだ国府紅しだれ」は凍害防止効果が高いことが見込まれ、全国から注目が集まっています。そこで、温度条件と台木の違いがモモ樹の耐凍性に及ぼす影響について検討しました。その結果、秋冬期の気温上昇により樹体の耐凍性が低下することが確認され、また「ひだ国府紅しだれ」を台木に利用することで、春季における耐凍性が実際に向上することが明らかとなったので報告します。

◆ホウレンソウの連続移植栽培

なかにしふみのぶ 中西文信 専門研究員

ホウレンソウの一大産地である飛騨地域では、夏場を中心とした直播栽培がおこなわれ、その技術も確立していますが、限られた圃場面積でさらに生産量を増やすためには、作付け回数を今以上に増やすことが必要となります。そこで、4月から12月にかけて、ペーパーポットで育苗した苗を簡易移植器で移植することで、慣行の直播栽培では4回のところ7回の収穫が可能になりました。また、品種の選択により、移植から収穫までの期間をさらに短縮できると考えられたので併せて報告します。

◆トマト葉先枯れ症の発生と軽減対策（第二報）

ふたむらあきお 二村章雄 専門研究員

トマトの葉先枯れ症は肥大した果実付近の葉の縁が枯れる症状であり、これにより枯れた部分は、灰色かび病と呼ばれる病気の感染源となることから、大きな問題となっています。葉先枯れ症の葉はカリウムの含有量が低下していることが確認されているため、対策として5月下旬に植え付けるトマトに対し、水に溶かした肥料によるカリウムの追肥を行いました。その結果、追肥をしない場合と比較すると、4~6段花房近くの葉で葉先枯れ症状を呈する葉数が減少したので報告します。

◆飛騨産「コシヒカリ」の品質と食味向上対策（第一報）

やまだたかし 山田隆史 専門研究員

飛騨の「コシヒカリ」は食味・品質共に高い市場評価を得ていますが、日本穀物検定協会による食味ランキングでは、最上位から二番目の「A」ランクに甘んじているのが現状です。さらに、近年散見される白未熟粒の原因として、登熟期の高温とともに窒素施肥量を控えていることが原因と想定されます。そこで、「コシヒカリ」に肥効と土づくり効果が期待できる家畜糞由来の肥料を施用し影響を調査しました。その結果、この施用により収量が増え、また、食味を低下させるタンパク質含量への影響もありませんでしたので、品質の変化も併せて報告します。